慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	経済学会報告(昭和卅八年度)
Sub Title	
Author	
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1964
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.57, No.6 (1964. 6) ,p.519(75)-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19640601-0075

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

から成り、一～三節は、福沢諭吉の思想形成を、四～六節は、福沢における啓蒙の意義と限界をしめし、七～九節において、福沢後期の社会思想を追い乍ら、最後の十節において、福沢晩年の宗教哲学に説き及ぶ。余論の三節は、同時代人、後代の学者、戦後世代による福沢の思想の評価の問題をとり扱う者である。

同時代人の福沢にたいする評価については、解説の筆者が、民権思想と平民主義を福沢の批判的継承者と看做し、福沢らの啓蒙思想に対角線的に対立する、二十年代の浪漫主義と三十年代の社会主義を、前三者に対置した区分法が注目にあたいする。つぎに後代の学者による評価の問題にかんしては、丸山真男氏の福沢諭吉論と故服部之総の福沢諭吉論を対比して紹介し、編者もむしろ後者に傾き乍ら、福沢を絶対主義者と看做す服部之総説にたいし、近代思想家（ブルジョア・イデオローグ）と看做す永田広志説を対置せしめて、暗に問題の所在を示し編者は論断を差し控えている。とはいえ解説の論脈よりして、編者の見解は以下のごとく理解せられる。

すなわち福沢の思想における、究極の課題は、日本を欧米列強にも劣らぬ、独立の近代国家たらしめんとするにあり、「民権を主張するは、外国に対して国権を張らんがため」である。かくて国権の確立こそが当面の目的となり、国内の民主化は近代化の手段であるところから、「大君のモナルキにこれなく候ては、……わが国の文明開化は進み申さず」と論断したこともある福沢が、明治政府の専制主義に同調の姿勢をとることには何のふしぎもない。これを要するに、絶対主義による上からの開化政策を支持した福沢も、明六社同人の他の啓蒙思想家と何ら異る者ではない、という訳である。さすが大家の論説だけに、学界年来の理論的・実証的な研究成果をよく踏まえて、定説を平易に解説して余す所なき労作であるが、本書に収録された福沢の著作からは、編者の論誼を裏付けることさえ容易ではあるまい。本書はこれを五部にわかち、一部は福沢の思想形成を、二部・三部は学問観・文明観・歴史観・人生観を伝えるものと做し、第四の分類は家族制度論、第五の部分に資本主義観を窺うに足る著作を収録せんとする趣きに見うけられる。このような分類の是非はさておき、各部に採択された作品を通覧すれば、著作年代の著しい偏りと、同一作品の重複せる採録とは、読者をして当惑の念を抱かせる程の者である。編者が福沢の主著と看做す、「文明論之概略」を抄録したのも遺憾であるが、福沢諭吉の思想形成を知る可く、その「晩年の思想」を伝える者と編者が自認する、「福翁自伝」を採択したのも理解のゆかぬ事ではある。かく自伝に依拠して、「その人みずからの口から、」「思想」を物語らせる小説めいた手法は、思想史学の方法に「空想」をもちこむことになろう。福沢諭吉の思想形成は、まさしく六〇年代の後半から七〇年代の前半にわたる、近代日本の文化革命の過程において把握さるべきものである。

これを要するに本書の欠陥は、著作年代の序列を軽視して、理論的根拠の薄弱な項目別分類に依拠した編成の結果、福沢の思想の体系性とその歴史的な発展の軌跡が完全に見失われたことにある。それゆえ塾生の談筵において、福沢の事蹟が語られる事の余りにも多く、福沢の思想が読まれる事は余りにも少い、という些事を無視すれば、かくも無思想的に分断された「思想体系」の一篇が、紹介されねばならぬ理由はない様に思われる。（筑摩書房刊・B6・四二九頁・四五〇円）

―田中　明―

経済学会報告（昭和卅八年度）

昭和三十八年

四月十九日　堀江帰一先生記念講演会

四月二十五日　集団的企業（コルフォーズ）における拡大再生産方式と蓄積率　常盤絢子

五月二日　教授就任講演　フィスカル・ポリシーの理論　大熊一郎

五月九日　フリードマン氏講演会　低開発地域における経済発展について　寺尾誠

五月十六日　近世初期、中部ドイツの農村都市　古田精司

五月二十三日　租税制度と企業の活動　矢内原勝

五月三十日　アフリカの経済統合　尾城太郎丸

六月六日　中小企業問題の国際的・歴史的・構造的視角　島崎隆夫

六月二十日　イギリス経済史学会の動向　高木寿一

六月二十七日　租税原則論と利益説　加藤寛

九月十九日　ソヴェート経済の視察報告　尾崎巌

九月二十六日　経済発展と就業機構　中村勝己

十月三日　アメリカ産業革命をめぐる若干の問題　岡田泰男

十月十日　アメリカ中西部における農業　安川正彬

十月十七日　わが国一八九〇年から一九二〇年までの出生数と総出生率の推計　飯田裕康

十月二十四日　ヒルファディングの株式会社論にかんする一考察　千種義人

十月三十一日　学会報告（理論経済学会）　富田重夫

十一月七日　学会報告（土地制度史学会）　常盤政治

（経済理論学会）　井村喜代子

十一月十四日　学会報告（経済学史学会）　野地洋行

（社会政策学会）　飯田鼎

十一月二十一日　学会報告（経済政策学会）　加藤寛

（財政学会）　古田精司

十一月二十八日　限界革命についての一考察　松浦保

十二月五日　二部門モデルにかんする考察　富田重夫

十二月十二日　F・E・C・のエネルギー問題について　白井厚

昭和三十九年

一月十六日　我が国農業における生産函数の計測　鳥居泰彦

一月二十三日　ガリアのコロヌス制度　宇尾野久

一月三十日　新古典派定理について　福岡正夫